

「ホームレス」の〈絶対的他者化〉からの脱却に関する一考察

——『ビッグイシュー日本版』の実験を事例として——

京都大学大学院 八鍬加容子

1 目的

現代社会において、市場の競争から「敗退」した「貧困者」は様々な形で〈他者化〉され、社会の周縁部に追いやられてきた。なかでも、路上や施設あるいはドヤ生活を営む人々は、〈他者化〉のなかでもさらに〈絶対的他者化（異人化）〉されてきた。「彼ら」と「我々」の間には明確な区分線が引かれ、「彼ら」には「経済的お荷物」「社会的脅威」「あわれみの対象」といったネガティブな価値判断が付与されてきた。ルース・リスターは、〈他者化〉は「象徴的排除の戦略」として作用し、人々は〈他者〉を容易に非難するようになると指摘（Lister 2004=2011）したが、〈絶対的他者化〉される「彼ら」にはこの排除の戦略は直接的かつ暴力的に行使される傾向が指摘できる。

本報告の目的は、こうした〈絶対的他者化〉からの脱却は可能か、という問いに対して、ホームレス状態の人々によって販売されている『ビッグイシュー日本版』の可能性と限界を検討することを通して答えようとする点にある。

2 方法

本研究は3つの方向性から考察を進めていく。第一は、『ビッグイシュー日本版』創刊号（2003年9月11日発売）～350号（2019年1月1日発売）の「今月の人」のコーナーの誌面分析を行う。「今月の人」は、ホームレス状態にある『ビッグイシュー日本版』販売者が自らのライフ・ストーリーを語るコーナーである。このコーナーにおいて、「ホームレス」当事者が自身の経験と生活史をどのように再構築して語るかを、350号全号のテキスト分析によって明らかにする。

第二は、同じく350号分の『ビッグイシュー日本版』「読者投稿欄」に着目し、読者のそこに表れる「ホームレス」観の生成と変容を分析する。同時に、「今月の人」や「読者投稿欄」を10年以上担当してきた編集者・記者への聞き取りも行い、「ホームレス」観の変遷をどのように再認しているかを明らかにする。

第三にビッグイシューに表出される意識や認識の変遷を考察する補助線として、同時期の『朝日新聞』内においてどのように「ホームレス」報道がなされたかを分析する。

3 結果

分析の結果、『朝日新聞』においては、「ホームレス襲撃」「公園テントの強制撤去」など、「社会問題」の当事者あるいは被害者として典型化された「ホームレス」報道が大半を占めた。一方『ビッグイシュー日本版』の「今月の人」においては、こうした「事件」がとりあげられることは稀で、いかにして「ふつうの人々」がホームレス状態に陥るのかについての複雑な過程が強調され、それが「ホームレス」観の変化へと繋がっていた。

4 結論

以上から、「彼ら」に対する〈絶対的他者化〉を乗り越える一つの可能性として、「均質な物語を解きほぐす」「その状態に陥るまでの複雑な過程を『ふつうの人々』の日常世界と地続きで描く」という試みの有効性が指摘できた。また、しばしば「彼ら」と線引きされた者は〈声〉を失いがちだが、その〈声〉を「発声」させ「手渡し」する回路の重要性も確認できた。

文献

Ruth Lister, 2004, *Poverty*, Polity Press. (= 2011, 松本伊智朗監訳・立木勝訳『貧困とはなにか——概念・言説・ポリティクス』明石書店.)